

# 他動詞虚辞構文の派生について

---

榎 田 裕 加

---

## 0. 序

他動詞虚辞構文 (Transitive Expletive Construction ; 以下、TEC) は英語では容認されないが、アイスランド語やドイツ語などでは問題なく容認される。<sup>1</sup>

- (1) a. \*There has someone eaten an apple.  
 b. \*There ate some food a man.

(Bobaljik and Jonas (1996:208))

- (2) a. Það hafa margir jólasveinar borðað þúðing. [Ice]  
*there have many Christmas. trolls eaten pudding*  
 ‘Many Christmas trolls have eaten pudding.’

- b. Es essen einige Mäuse Käse in der Küche. [Ge]  
*there eat some mice cheese in the kitchen*  
 ‘There are some mice eating cheese in the kitchen.’

(*ibid.*, p.209)

TEC がどのような言語で容認されるのかについては、これまで様々な観察がなされてきた。例えば、Bures(1992)、Bobaljik and Jonas(1996)、Jonas(1996)は、TECはObject Shiftを示す言語で容認されるという一般化を与えている。しかし、この一般化にはいくつかの例外があげられる。例えば、フェロー語はObject Shiftを示さないにもかかわらず、TECを容認する。また、ロマンス語にもObject Shiftを示す言語があるが、なぜこれらの言語ではTECが観察さ

れないのか、という疑問も生じる。このことから、TECの容認可能性と Object Shift は直接には関係していないと思われる。では、TEC は実際にはどのような言語で観察されるのであろうか。Bures(1992)、Vikner(1995)、Holmberg and Platzack (1995)、Bobaljik and Jonas (1996)、Jonas (1996) で示されている資料をもとに、表1のようにまとめることができる。

〈表1〉

	TEC	V-to-T	V2	Object Shift
German	○	○	○	○
Icelandic	○	○	○	○
Faroese	○	○	○	×
Danish	×	×	○	×
English	○/×	×	×	×
French	×	○	×	×

表1から明らかなように、TECは「顕在的なV-to-T移動を示すV2言語」で容認される。この事実に基づき、本論では、なぜ英語のようなnon-V2言語ではTECが容認されず、V2言語では容認されるのかについて Minimalist Program の枠組みにおいて論じていく。<sup>2</sup>

なお、基本的にはChomsky(1995)で示されている考えに従っていくが、Chomsky(1995)とは異なり、(3)の構造を用いて議論を進めていく。

(3) [CP [AgrSP [TP [AgrOP [vP Subj[vP V Obj]]]]]]

本論の構成は以下のとおりである。1節では、there構文の派生についての基本的な考えを示す。2節では、なぜ英語ではTECが容認されないのかについて考察する。3節では、なぜV2言語ではTECが容認されるのかについて論じていく。4節は結語である。

## 1. There 構文の派生

### 1.1 'There'の位置

一般に、there は拡大投射原理(Extended Projection Principle；以下、EPP)を満たすために [Spec, TP] (もしくは [Spec, AgrSP]) に挿入されると仮定されている。これに対し、本節では、V2 言語の 'there' は [Spec, CP] に挿入されると主張していく。

なお、V2 文における動詞 (あるいは助動詞) の「義務的な第二位置への移動」に関しては、(a)VのCへの移動、(b)Cの強いV素性によって駆動される、と仮定していく。また、先頭の位置には話題化された要素 (話題化された主語を含む) が現れるが、動詞が顕在的にCに位置していることから、これらの要素は [Spec, CP] を占めていることになる。

#### 1.1.1 'There' in [Spec, CP]

V2 言語で 'there' が [Spec, CP] に挿入されることを示す証拠としては、次の3つがあげられる。第一に、'there' は話題化された要素と共起することができない。

- (4) a. Es ist ein Junge gekommen  
*There is a boy come*  
 b. Gestern ist ein Junge gekommen  
*Yesterday is a boy come*  
 c. \*Gestern ist es ein Junge gekommen  
*Yesterday is there a boy come*

[Ge] (Vikner (1995 : 69))

- (5) a. það hefur komið strákur  
*There has come (a) boy*  
 b. Ígær hefur komið strákur  
*Yesterday has come (a) boy*  
 c. \*Ígær hefur það komið strákur  
*Yesterday has there come (a) boy* [Ice] (*ibid.*, p.70)

(4c)、(5c)に示すように、*es* / *það* ‘there’ と話題化要素は共起することができない。このことは、両者が同じ位置、つまり [Spec,CP] に生起していることを示している。

第二に、ドイツ語の *es* ‘there’は補文標識の後に現れることができないが、アイスランド語の *það* ‘there’は補文標識の後に現れることができる。

- (6) a. \*Ich weiß, daß es ein Junge gekommen ist [Ge]  
 b. Ich weiß, daß ein Junge gekommen ist  
*I know that (there) a boy come is*  
 c. Ich weiß, es ist ein Junge gekommen. (a-b. *ibid.*, p.70)
- (7) a. Ég veit að það hefur komið strákur [Ice]  
 b. \*Ég veit að hefur komið strákur  
*I know that (there) has come (a) boy (ibid.)*

アイスランド語とドイツ語は、主節では義務的に V2 現象を示すという点で類似しているが、補文ではその振る舞いは異なる。つまり、ドイツ語では補文標識が現れる場合には V2 現象は示さず、アイスランド語では補文標識が現れる場合にも V2 現象を示すという違いが見られる。この事実に基づき、Vikner (1995) などでは、アイスランド語とドイツ語の補文に対し、以下のような構造を提案している。

- (8) German : V [<sub>CP</sub> daß [<sub>IP</sub>.....V]] → non-V2  
 Icelandic : V [<sub>CP</sub> að [<sub>CP</sub> topic [<sub>C</sub>, V.....]]] → V2

この構造に基づくと、(6)で補文標識の後に *es* が現れることができないのは、*es* の位置 ([Spec, CP]) が確保されていないためであると考えられる。一方、補文標識が現れる場合にも V2 現象を示すアイスランド語に対しては、2つの CP が重なった構造 (CP recursion) が仮定されている。先に述べたように、V2 言語では話題化された要素と ‘there’ は同じ位置に現れる。従って、補文標識が現れる場合にも *það* が生起できることは、この構造から正しく予測することができる。

第三に、アイスランド語の *það* ‘there’ は ECM 構文の不定詞補部の主語位置に現れることができない。

- (9) \* *Ég tel* [<sub>TP</sub> *pað vera* *marga stúdent*a i *þessum bekk*]  
*I believe there be.INF many students in this class*

[Ice] (*ibid.* p. 185)

ECM 動詞の不定詞補部は CP ではなく TP である。もし、*pað* が [Spec, TP] に挿入されるのであれば、(10)の英語の例と同様に、(9)が文法的であることが予想される。

- (10) *I believe* [<sub>TP</sub> *there* [<sub>T'</sub> *to be many students in this class*]]  
 しかし、実際には(9)は非文である。従って、*pað* は [Spec, TP] ではなく [Spec, CP] に位置していると考えることができる。

以上の例から、V2 言語における 'there' が [Spec, CP] に位置していると考えることができる。

### 1.1.2 拡大投射原理

先に述べたように、'there' は EPP を満たすために挿入される要素である。従って、'there' が [Spec, CP] に挿入される V2 言語では、EPP が [Spec, CP] で満たされることが予測される。しかし、これは、通常、(11)のように仮定されている EPP の定義とは明らかに異なる。

- (11) *Extended Projection Principle*

[Spec, TP] must be filled overtly. (Collins (1997 : 13))

本節では EPP の効果について見直し、V2 言語における 'there' の [Spec, CP] への挿入が、EPP の要請によることを示していく。

EPP を見直すにあたって、各言語の文先頭位置に現れる要素に注目していく。英語では、主語が必ず文先頭位置に現れる。英語における主語の要請は絶対的なものであり、これは意味内容を欠いた虚辞が存在することからも明らかである。一方、V2 言語では、話題化要素 (話題化された主語を含む) が文先頭位置に現れる。これらをまとめると、(12)のように示すことができる。

- (12) XP V (YP)

V2 languages : XP is topic in V2 sentences, and it is subject in non  
 V2 sentences.

English : XP is subject

ここで着目したい点は、

- ・文先頭位置は何らかの XP によって義務的に埋められなくてはならない
- ・XP は必ずしも主語ではなく、主語あるいは話題化要素である

の2点であり、(12)は(13)のように書き換えることができる。

(13) *Extended Projection Principle (revised)*

Predication must have XP in its initial position. XP is *subject* or *topic*.

*predication* の定義に関しては、基本的に Nakano (class lecture) の主張に従っていく。Nakano (class lecture) は、(14)に示すように、*Predication* は「Core Predication (VP)+Tense」であると述べている。

(14)  $[_{CP} [_{IP} \text{Subj I(Tense)} [_{VP} \text{t}_{\text{Subj}} \text{V} \dots]]]$   
Core Predication

Predication

本論では、(14)をさらに(15)のように言い換えていく。

(15) *Predication* is a maximal projection whose head has [+V] features (including Tense feature).

(15)を(13)の定義に当てはめると、最終的に EPP は(16)のように示すことができる。

(16) *Extended Projection Principle (revised)*

*Predication*, a maximal projection whose head has [+V] features, must have XP in its specifier. XP is *subject* or *topic*.

(16)をもとに、具体的に英語と V2 言語の場合を考えていく。英語では V と T が [+V] 素性を持っている。従って、*predication* である TP の指定辞が何らかの XP によって埋められなくてはならない。Rizzi (1991) で指摘されているように、TP は「主語-述部」関係を示す。従って、この場合の XP は典型的には主語である。また、there 構文では、*there* は EPP を満たすために [Spec, TP] に挿入される。

一方、V2 言語では V、T、C が [+V] 素性を持ち、CP が *predication* となる。従って、[Spec, CP] を何らかの XP によって埋めなくてはならない。この

場合の XP は話題化された要素である(話題化された主語を含む)。また、先に述べたように、TP は「主語-述部」関係を示すため、[Spec, TP] には主語が現れる。there 構文では、‘there’ は EPP を満たすために [Spec, CP] に挿入される。

## 1.2 格・ $\phi$ 素性照合

主語と目的語は VP 内に基底生成され、それぞれ適切な照合領域で格と  $\phi$  素性を照合する。例えば、英語の there 構文は(17)、(18)のように派生する。

- (17) a. There arrived a man in the room.  
 b.  $[_{AgrSP} FF(a\ man)_{Subj} AgrS-T-FF(arrive)_V [_{TP} there [_{T'} t_{T-V} [_{(\nu P)} [_{VP} t_V t_{Subj}]]]]]]]$
- (18) a. I believed there to arrive a man in the room.  
 b.  $...[_{AgrOP} FF(a\ man)_{Subj} AgrO-FF(believe)_V [_{\nu P} t_{Matrix-Subj} t_V [_{VP} t_V [_{TP} there [_{T'} to\ arrive\ t_{Subj}]]]]]]]$

先に述べたように、there 構文では *there* が EPP を満たす。従って、本来 EPP を満たすべき主語は顕在的に移動する必要はなく、形式素性のみが格と  $\phi$  素性を照合するために適切な Agr へ LF 移動する。具体的には、(17)では、*a man* の素性は AgrS へ付加し、主格と  $\phi$  素性の照合を行う。(18)では、*a man* の素性は AgrO へ付加し、対格と  $\phi$  素性の照合を行う。英語は格変化が豊かでないため、実際に、(17)の *a man* が主格を示し、(18)の *a man* が対格を示すのかは明らかでない。しかし、格変化の豊かなアイスランド語ではそれは明らかである。(19)と(20)はそれぞれ(17)と(18)に対応するアイスランド語の例文であるが、(19)では‘some boats’は主格でなくてはならず、(20)では対格でなくてはならない。

- (19) Það höfðu sennilega sokkið einhverjir bátar/  
*There had (3PL) probably sunk some boats*  
 \*einhverja báta í firðnum  
 (NOM/\*ACC) in bay-the

- (20) *Hann taldi* [*pro* hafa sokkið \*einhverjir bátar/einhverja báta í  
*He believed have sunk some boats* (\*NOM/ACC) *in*  
*firðnum*]

*bay-the*

[Ice] (Vikner (1995 : 175-176))

本論では、(19)、(20)に示した事実が英語などの他言語にも当てはまると考えていく。

また、(17)、(18)に示す主語の非可視的な LF 移動を示す証拠としては、(21)が挙げられる。<sup>3</sup>

- (21) a. There arrived three men (last night) without identifying themselves.

- b. There arrived with their own books three men from England.

(Chomsky (1995 : 274))

(21 a)では、*three men* と *themselves* を同一指標付けすることができる。このことから、何らかのレベルで、*three men* の素性が TP に付加した *without* 句よりも構造上高い位置、つまり AgrS に移動していることがわかる。

これらの仮定に基づき、以下の節では、non-V2 言語と V2 言語における TEC の派生について考察していく。

## 2. Non-V2 言語

### 2.1 TEC の派生

英語の *there* 構文の派生は前節で示したが、なぜ英語では TEC が容認されないのであろうか。*there* 構文で他動詞が現れる場合の基底構造は(22)であるが、この構造には何の問題もない。

- (22) [<sub>TP</sub> *there* [<sub>AGROP</sub> [<sub>LP</sub> *Subj* [<sub>VP</sub> *V Obj*]]]]

従って、LF での派生に問題があると考えられる。

LF 移動は、顕在的移動と同様に循環的に適用される。例えば、他動詞構文は(23)に示すように派生する。まず、主語が EPP の要請により、顕在的に [Spec, TP] へ移動する(23 a)。LF では、最初に V の形式素性 (FF(V)) が AgrO へ



移動し、複合体 [AgrO-FF(V)] を形成する (23 b)。次に、[AgrO-FF(V)] が目的語の形式素性 (FF(Obj)) を誘引 (Attract) し、対格と  $\phi$  素性を照合する (23 c)。この際、V の Minimal Domain は AgrOP と  $vP$  であるが、Attract される候補となる主語はすでに [Spec, TP] へ移動している。従って、Minimal Domain 外にある目的語が Attract の対象となる。[AgrO-FF(V)] は、T を経由して AgrS にまで移動し、複合体 [AgrS-T-AgrO-FF(V)] を形成する。[AgrS-T-AgrO-FF(V)] は主語の形式素性 (FF(Subj)) を Attract し、主格と  $\phi$  素性を照合する (23 d)。

- (23) Overt : [TP Subj [<sub>AgrOP</sub> [<sub>vP</sub>  $t_{Subj}$  V [<sub>vP</sub>  $t_v$  Obj]]]]]  
 LF : a. [TP Subj [<sub>AgrOP</sub> AgrO-FF(V) [<sub>vP</sub>  $t_{Subj}$  [<sub>vP</sub>  $t_v$  Obj]]]]]  
 b. [TP Subj [<sub>AgrOP</sub> FF(Obj) AgrO-FF(V) [<sub>vP</sub>  $t_{Subj}$  [<sub>vP</sub>  $t_v$   $t_{Obj}$ ]]]]]  
 c. [<sub>AgrSP</sub> AgrS-T-AgrO-FF(V) [TP Subj [<sub>T</sub>,  $t_{T-AgrO-FF(V)}$  [<sub>AgrOP</sub> FF(Obj)  $t_{AgrO-FF(V)}$  [<sub>vP</sub>  $t_{Subj}$  [<sub>vP</sub>  $t_v$   $t_{Obj}$ ]]]]]]]  
 d. [<sub>AgrSP</sub> FF(Subj) AgrS-T-AgrO-FF(V) [TP  $t_{Subj}$  [<sub>T</sub>,  $t_{T-AgrO-FF(V)}$  [<sub>AgrOP</sub> FF(Obj)  $t_{AgrO-FF(V)}$  [<sub>vP</sub>  $t_{Subj}$  [<sub>vP</sub>  $t_v$   $t_{Obj}$ ]]]]]]]]]

では、TEC では何が問題となるのであろうか。注目すべきは、there 構文では EPP が *there* によって満たされるため、主語が LF まで [Spec,  $vP$ ] にとどまっている点である。(24) に示すように、LF では最初に FF(V) が AgrO へ移動し、それによって形成された複合体 [AgrO-FF(V)] が目的語の素性を Attract する。

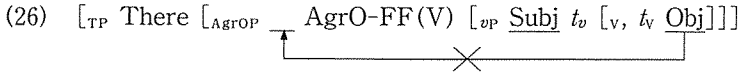
- (24) [TP There [<sub>AgrOP</sub> AgrO-FF(V) [<sub>vP</sub> Subj  $t_v$  [<sub>v</sub>,  $t_v$  Obj]]]]]  
 しかし、ここで問題が生じる。Chomsky (1995) の *Attract F* の定義に従うと、素性を Attract する場合には、最も近い素性がその対象物となる。

(25) *Attract F*

K attracts F if F is the closest feature that can enter into a checking relation with a sublabel of K. (Chomsky (1995 : 297))

TEC の派生では、(26) に示すように、[AgrO-FF(V)] から最も近い素性は目

的語の素性ではなく、主語の素性である。従って、[AgrO-FF(V)]は目的語の素性を Attract することができず、結果的に派生は破綻する。



このように、英語では、[Spec, *vP*]にとどまった主語が目的語の形式素性の Attract を阻止するため、TEC が容認されない。

## 2.2 例外的 TEC

先に述べたように、基本的に、英語では TEC が容認されない。しかし、特定の他動詞に限って容認される場合もある。(27)に挙げた動詞は、その一例である。

- (27) await, confront, cross, enter, follow, reach, seize, take (place/  
shape), want (Levin (1993 : 89))

ただし、この場合、主語は必ず重名詞句移動 (Heavy NP Shift) を受けて後置される。

- (28) a. Suddenly there entered the hall an ugly old man.  
 b. Suddenly there open the door a six-eyed troll.  
 c. There was slowly making its way toward (=was approaching) us a figure in black.  
 d. In the tower there strikes the hour a clock of many chimes.  
 e. There hit the stands a new journal.  
 f. There visited us last night a large group of people who traveled all the way from India.  
 g. And there followed him a certain man ...  
 (a. Levin (1993 : 90), b. Bobaljik and Jonas (1996 : fn17), c-d. Bolinger (1977 : 102), e-f. Chomsky (1995 : 343), g. Hannay (1985))

なぜ、このような語順に限って TEC が容認されるのであろうか。この場合の構造は(29)である。(重名詞句移動を受けた名詞句の位置に関しては、Postal

(1974)、McCawley (1982) などの考えに従い、TP に付加していると仮定する。)

(29) [TP [TP there [AgrOP [vP t<sub>subj</sub> V [vP t<sub>v</sub> Obj]]]]] Subj]

重名詞句移動は他の移動とは異なり、素性照合によって駆動するものではない。しかし、(30) に示すように、重名詞句移動を受けた名詞句は寄生空所を認可することができる。

(30) a. John offended t<sub>i</sub> by not recognizing e immediately, his favorite uncle from Coevland.

b. Susan always files t<sub>i</sub> without reading e properly, all the memos from the low level a administration.

このことから、 $\bar{A}$  移動と類似した特性を持つと考えられる。重名詞句移動がどのような特性を持ち、どのように適応されるのかについては今後の研究課題として残しておくことにするが、今の段階では、格と  $\phi$  素性を含めた全ての素性が移動すると仮定する。従って、(29) で、[Spec, vP] には主語の痕跡しか残されていないことになり、[AgrO-FF(V)] が目的語の素性を Attract する際、それを阻止するものが何もないことになる。その結果、派生は問題なく収束する。また、重名詞句移動を受けた主語の格と  $\phi$  素性は、LF で AgrS へ繰り上がり、そこで照合を受ける。

ただし、このような語順であれば全ての他動詞が許されるわけではない。例えば、(31) に示すように、主語が複合名詞句移動を受けても *eat* は容認されない。

(31) \*There ate this apple an ugly ald man.

Bolinger (1977) は、意味的に対応する自動詞がある他動詞に限り、*there* 構文に現れることが許されると述べている。この点については、何らかの意味的な制約があるように思われるが、今後の研究課題とする。

### 3. V2 言語における TEC

1 節で示したように、V2 言語では 'there' は [Spec, CP] に挿入される。従っ

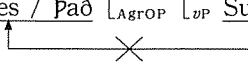
て、これらの言語における there 構文の派生は(32)のように示される。

- (32) [<sub>CP</sub> Es / það [<sub>C</sub> C-Agr<sub>S</sub>-T-Agr<sub>O</sub>-V [<sub>AGRSP</sub> *t*<sub>AGRS-T-AGRO-V</sub> [<sub>TP</sub> S-Adv  
 [<sub>TP</sub> Subj *t*<sub>T-AGRO-V</sub> [<sub>AGROP</sub> *t*<sub>AGRO-V</sub> [<sub>VP</sub> VP-Adv [<sub>VP</sub> *t*<sub>Subj</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>V</sub>  
 Obj]]]]]]]]]]]

(32)の構造で英語と異なる点は‘there’の位置だけではない。英語では、主語は顕在的には移動せず [Spec, *v*P] にとどまっているが、V2 言語では、顕在的に [Spec, TP] へ移動する。これは、(33)に示すように、主語が文副詞と VP 副詞の間に現れることから明らかである。

- (33) a. það luku sennilega einhverjir stúdentar alveg  
*there finished probably some students completely*  
 [<sub>VP</sub> *verkefninu*]  
*the.assignment*  
 ‘Some students probably completely finished the assignment.’  
 b. \*það luku sennilega alveg [<sub>VP</sub> einhverjir stúdentar  
*there finished probably completely some students*  
*verkefninu*]  
*the.assignment* [Ice] (Bobaljik and Jonas (1996 : 212))

主語が顕在的に [Spec, TP] に移動することから、‘there’の位置が [Spec, TP] である可能性は構造の面からも排除される。(34)に示すように、もし、‘there’が [Spec, TP] に挿入されるのであれば、主語の移動先がすでに埋められていることになり、主語は適切な位置へ移動することができなくなる。

- (34) [<sub>CP</sub> C-Agr<sub>S</sub>-T-Agr<sub>O</sub>-V [<sub>AGRSP</sub> *t*<sub>AGRS-T-V</sub> [<sub>TP</sub> es / það [<sub>AGROP</sub> [<sub>VP</sub> Subj  
*t*<sub>V...</sub>]]]]]]] 

このように、構造の面からも ‘there’ の位置が [Spec, TP] である可能性は排除される。

では、なぜ V2 言語では、TEC が容認されるのであろうか。TEC の派生は(35)である。

- (35) [<sub>CP</sub> there [<sub>C</sub> C-Agr<sub>S</sub>-T-Agr<sub>O</sub>-V [<sub>AGRSP</sub> Subj *t*<sub>AGRS-T-AGRO-V</sub> [<sub>TP</sub> *t*<sub>Subj</sub>  
*t*<sub>T-AGRO-V</sub> [<sub>AGROP</sub> FF(Obj) *t*<sub>AGRO-V</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>Subj</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>V</sub> *t*<sub>Obj</sub>]]]]]]]]]

英語とは異なり、‘there’は [Spec,CP] に挿入され、主語は顕在的に [Spec,TP] へ移動する。従って、[Spec, *v*P] には主語の痕跡しか残されていないことになり、[AgrO-V] が目的語の形式素性 (FF(Obj)) を Attract する際、それを阻止するものが何もないことになる。従って、[AgrO-V] は FF(Obj) を Attract することができ、結果として TEC の派生は収束する。

このように、V2 言語で TEC が容認されるのは、(a) ‘there’ が [Spec,CP] に挿入されるため、(b) 主語が顕在的に [Spec,TP] に移動するためであると考えることができる。

## 5. 結語

本論では、TEC が「顕在的な V-to-T 移動を示す V2 言語」でのみ容認される事実に着目し、non-V2 言語と V2 言語でなぜそのような違いが出てくるのかについて論じた。具体的には、V2 言語と non-V2 言語では there と主語の位置が表層で異なり、non-V2 言語では、[Spec, *v*P] に留まった主語が目的語の素性の誘引を阻止するため、TEC が容認されないと主張した。

## 注

- ※ 本論は、第 36 回名古屋大学英文学会での発表内容に加筆し、修正を加えたものである。
- 1 その他に TEC を許す言語、許さない言語には次のものがあげられる。
    - ・ TEC を許す言語：Dutch、Yiddish、Frisian
    - ・ TEC を許さない言語：Norwegian、Danish、Swedish、Africaans
  - 2 表 1 に示すように、デンマーク語は「顕在的な V-to-T 移動を示さない V2 言語」であり、TEC を容認しない。TEC を容認するか否かに、具体的に V-to-T 移動がどのように関わってくるのかを説明しなくてはならないが、現時点では豊富なデータがないため、この議論については別の機会に譲ることにする。
  - 3 この現象は英語に限らず、イタリア語、ドイツ語、アイスランド語などの他言語でも観察される。

- (i) sono entrati tre uomini senza identificar si [Italian]  
*are entered three men without identifying themselves*  
 'three men entered without identifying themselves'  
 (Chomsky (1995 : 274))
- (ii) es sind gestern viele Leute angekommen, ohne sich zu  
*there are yesterday many people arrived without themselves to*  
*identifizieren*  
*identify*  
 'many people arrived yesterday without identifying themselves'  
 [Ger] (*ibid.*)

## 参考文献

- Bobaljik, Jonathan David, and Dianne Jonas. 1996. "Subject positions and the roles of TP," *LI* 27, 195-236.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and form*. London : Longman.
- Bures, Anton. 1992. "There is an argument for an LF cycle here," *CLS* 28, 14-35.
- Chomsky, Noam. 1993. "Minimalist program", in *The minimalist program*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local economy*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Collins, Chris, and Höskuldur Thráinsson. 1996. "VP-internal structure and object shift in Icelandic," *LI* 27, 391-444.
- Hannay, Michael. 1985. *English existentials in Functional Grammar*. Dordrecht : Foris Publications.
- Holmberg, Anders, and Christer Platzack. 1995. *The role of inflection in Scandinavian syntax*. Oxford : Oxford University Press.
- Jonas, Dianne, and Jonathan David Bobaljik. 1993 "Specs for subjects : The role of TP in Icelandic," *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 59-98.
- Jonas, Dianne. 1996. "Clause structure, expletives and verb movement," in *Minimal ideas: Syntactic studies in the Minimalist framework*, eds. Werner Abraham, Samuel David Epstein, Höskuldur Thráinsson and C. Jan-

- Wouter Zwart, 167-188. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lasnik, Howard. 1992. "Case and expletives : Notes toward a parametric account," *LI* 23, 381-405.
- Lasnik, Howard. 1995. "Case and expletives revisited : On Greed and other human failings," *LI* 26, 615-633.
- Levin, Beth. (1993) *English verb classes and alternations : A preliminary investigation*. Chicago, London : The University of Chicago Press.
- McCawley, James D. "Parentheticals and discontinuous constituent structure," *LI* 13, 91-106.
- Schwartz, Bonnie D., and Sten Vikner. 1996. "The verb always leaves IP in V2 clauses," in *Parameters and functional heads : Essays in comparative syntax*, eds. Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 11-61. Cambridge : Cambridge University Press.
- Sigurðson, Halldór Armann. 1991. "Icelandic Case-marked PRO and the licensing of lexical arguments," *NLLT* 9, 327-363.
- Vikner, Sten. 1995. *Verb movement and expletive subjects in the Germanic languages*. New York : Oxford University Press.
- Whitney, Rosemarie. 1982. "The syntactic unity of wh-movement and complex NP shift," *Linguistic Analysis* 10, 299-319.

## Synopsis

## On the Derivation of Transitive Expletive Constructions

By Yuka Makita

*Transitive Expletive Constructions* (henceforth, TECs) are not allowed in English, while they are acceptable in V2 languages with overt V-to-T movement such as Icelandic and German.

- (1) a. \*There has someone eaten an apple.  
 b. \*There ate some food a man.
- (2) a. Það hafa margir jólasveinar borðað þúðing . [Ice]  
 there have many Christmas.trolls eaten pudding  
 ‘Many Christmas trolls have eaten pudding.’  
 b. Es essen einige Mäuse Käse in der Küche. [Ge]  
 there eat some mice cheese in the kitchen  
 ‘There are some mice eating cheese in the kitchen.’

Based on this observation, I investigate the derivation of TECs in the framework of Minimalist Program, and discuss why English does not allow TECs and why TECs are restricted to V2 languages.

In order to compare non-V2 languages with V2 languages, I assume the following surface structures of *there*-construction in non-V2 and V2 languages.

((3) and (4) are the examples with unaccusative verbs.)

- (3) non-V2 languages (ex. English)

[<sub>TP</sub> There [<sub>(vp)</sub> [<sub>VP</sub> V Subj]]]] (V=unaccusative verb)

- (4) V2 languages (ex. Icelandic, German)

[<sub>CP</sub> Es / Það [<sub>C</sub> C-AgrS-T-V [<sub>AGRSP</sub> *t*<sub>AGRS-T-V</sub> [<sub>TP</sub> Subj *t*<sub>T-V</sub> [<sub>(vp)</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>V</sub> *t*<sub>Subj</sub>]]]]]]]]

(3) and (4) show that the two types of languages are different in two points. The first one is the position of ‘there’; ‘there’ is inserted in [Spec, TP] in non-V2 languages, while it is in [Spec, CP] in V2 languages. The second one is the



surface position of subject : subject remains within VP in non-V2 languages while it moves overtly to [Spec, TP] in V2 languages.

I propose that the surface positions of 'there' and subject are crucial for convergence of TECs. The derivation of TECs in non-V2 languages is indicated in (5) :

$$(5) \quad [{}_{\text{TP}} \text{There} [{}_{\text{AgrOP}} \text{AgrO-FF(V)} [{}_{\text{VP}} \text{Subj } t_v [{}_{\text{VP}} t_v \text{Obj}]]]]$$

At LF, the complex [AgrO-FF(V)] must attract the formal features of object (FF(Obj)) in order to check accusative Case and  $\phi$ -features. However, the subject remaining in [Spec,  $\nu$ P] blocks the attraction of FF(Obj), since the closest features for [AgrO-FF(V)] is FF(Subj), not FF(Obj). Therefore, the derivation of TECs crashes in non-V2 languages. On the other hand, the derivation of TECs in V2 languages is indicated in (6):

$$(6) \quad [{}_{\text{CP}} \text{There} [{}_{\text{C}} \text{C-Agr}_s \text{-Agr}_o \text{-V} [{}_{\text{AgrSP}} \dots [{}_{\text{TP}} \text{Subj } t_{\text{T-AgrO-V}} [{}_{\text{AgrOP}} t_{\text{AgrO-V}} [{}_{\text{VP}} t_{\text{Subj}} t_v [{}_{\text{VP}} t_v \text{Obj}]]]]]]]]$$

As noted above, subject moves to [Spec, TP] overtly in V2 languages so that nothing but trace of subject remains in [Spec,  $\nu$ P]. Therefore, the complex [AgrO-FF(V)] can attract FF(Obj) and the derivation converges.